

『老乞大』二つの清代改訂本における編纂方針の違い
— “呢”の改訂をめぐって(下) —

石黒 章予

4. 分析

4.1. 分布の不均衡

『老乞大新釈』において77例あった“呢”は『重刊老乞大』では17例へと削減された。細かく見てみると、第60話で『老乞大新釈』にはなかった“呢”が『重刊老乞大』で添加された1例以外は、すべて『老乞大新釈』にあった“呢”が『重刊老乞大』では削除されるという改訂である。

『重刊老乞大』で残された17例の“呢”を見てみると、その分布にずいぶんばらつきがあることが目につく。第1話から第30話までに『重刊老乞大』で残った“呢”は、第6話での⑦停頓の“呢”1例だけであるが、第65話から第77話までの13話の中では、9例の“呢”が残り、その用法も①特指、②選択、④反語、⑤確認、⑦停頓とさまざまである。この分布の不均衡は何に由来するのであろうか？

4.2. 第64話までの状況

『重刊老乞大』で残った“呢”の分布を詳細に見てみよう。第1話から第64話までの間で残った“呢”は以下の合計6例である(※)。

(1) 第6話 ⑦停頓

【新】這麼的呢狠好。(6/3a9)

【重】這麼的呢狠好。(6/3a7)

(2) 第31話 ④反語

【新】我們與你驟然相會，大哥就這般見愛，給茶飯吃，怎麼敢恠呢？(31/13b8-9)

【重】我們與你驟然相會，大哥就這般見愛，給茶飯喫，怎麼敢恠呢？(31/13a6-7)

(3) 第35話 ⑦停頓

【新】既這般利害麼，後頭呢用絆罷。(35/15a5-6)

【重】既這般利害麼，後頭呢用絆罷。(35/14b2)

(4) 第37話 ④反語

【新】怎敢就容留你們住呢？(37/15b10)

【重】敢容留你們住呢？(37/15a6)

(5) 第56話 ④反語

【新】萬一在先一樣的價錢麼，一定虧本，誰肯帶來呢？(56/23b7-8)

【重】萬一在先一樣的價錢麼，一定虧本，誰肯帶來呢？(56/22b7-8)

(6) 第 60 話 ㊦停頓

【新】你摠要賣的，咱們好商量。(60/25a10)

【重】你摠要賣呢，咱們好商量。(60/24a9)

用法としてはいずれも㊤反語、㊦停頓に限定され、他の用法のものはすべて削除されている。

ここで、『老乞大新釈』にはなかった“呢”が『重刊老乞大』で添付された唯一の例について確認しなければならない。これは何か特殊な要素があつてのことなのだろうか？

(7) 第 60 話 ㊦停頓

【旧】既你待賣時，咱每商量。(60/22a8-9)

【翻】你既要賣時，咱們商量。(60/II8a6-7)

【新】你摠要賣的，咱們好商量。(60/25a10)

【重】你摠要賣呢，咱們好商量。(60/24a9)

これは表 1 の「仮定条件句」にあたる。同じ用法の他の文と比較してみよう。

(8) 第 68 話 ㊦停頓

【旧】更不時，恁都則這裏有者。(68/25a6)

【翻】更不時，你都只這裏等候着。(68/II18b5-6)

【新】不要那麼的呢，你們都在這裏等候着。(68/28b7-8)

【重】不要那麼的呢，你們都在這裏等候。(68/27b4)

(9) 第 77 話 ㊦停頓

【旧】上等弓若樺了時，買的人不委信。(76/28a6)

【翻】上等弓，若樺了時，買的人不信。(77/II31b1-3)

【新】是上等的，若樺了呢，買的人就不信了。(77/32b8-9)

【重】是上等的，若樺了呢，買的人就不信了。(77/31b3)

これらを並べてみると、第 60 話において『老乞大新釈』は“的”が“呢”であつてもよかつたように感じる。特殊な例というよりは、『翻訳老乞大』から『老乞大新釈』への改訂時にたまたま改訂されていなかったものが『重刊老乞大』で改訂されたという可能性が大きいと思われる。

用法の面からみると、“呢”を多く削除しようとする『老乞大新釈』から『重刊老乞大』への改訂において、㊤反語及び㊦停頓の用法は存続する傾向が強いと言える。“呢”を削除しようとする意思が働く中で、これらはあつた方が自然な用法だつたのではないだろうか。それゆえに、反語・停頓の用法は“呢”の用法の中で存続しやすかつたと考えられる。

4.3. 第 65 話以降の状況

次に、第 65 話から第 77 話を見てみよう。“呢”の用法は㊤反語、㊦停頓以外にも㊠

特指、②選択、⑤確認・誇張にも拡大され、残された“呢”の数も13話中に9例と多い。これは改訂者が変わり、改訂者の語感が異なっていたことに由来するのではないかと思われる。改訂者により存続させる“呢”の用法が違ったことを裏付けるのは、『重刊老乞大』において第1話から第77話までの⑦停頓の“呢”は、そのすべてが残されているが、その後における停頓の“呢”はすべて削除されていることである。削除されたものは以下の3例である。

(10) 第81話 ⑦停頓

【新】家中呢，請大公，大婆，… (81/33b5-8)

【重】祖父，阿婆，父親，母親，… (81/32a9-32b1)

(11) 第81話 ⑦停頓

【新】外頭呢，請公公，婆婆，… (81/33b9-34a5)

【重】又請外公，外婆，舅舅，… (81/32b1-7)

(12) 第103話 ⑦停頓

【新】這們的呢，價錢依着你。(103/42a5)

【重】這麼的，價錢依着你。(103/40a7)

このことから、第78話から第80話にかけてのどこかで改訂者が変わった可能性が大きいと考えられる。

第90話以降の“呢”は全く残っていないが、そもそも『老乞大新釈』における“呢”自体がわずかである。

4.4. 用法の安定度

表2の“呢”を用法で分けると、『老乞大新釈』における用法は、

①特指=31

②選択=6

③反復=1

④反語=19

⑤確認、誇張=10

⑥持続=5

⑦停頓=8

であったのに対し、『重刊老乞大』においては、

①特指=4

②選択=1

③反復=0

④反語=6

⑤確認、誇張=1

⑥持続=0

⑦停頓=5

となっている。

③反復、⑥持続の用法は『老乞大新釈』においても多くなかったが『重刊老乞大』では消失してしまうことから、この時代では“呢”の用法として安定して使われていなかったのかもしれない。反対に先にもふれたように④反語、⑦停頓は比較的多く残されたことから、③反復、⑥持続の用法に比べ、安定して使用される度合いが高かったと言えそうである。こうした用法の分類からみた安定度はおよそ、

④、⑦>①、②、⑤>③、⑥

ということになるうか。

4.5. 申し合わせの可能性

このほか、表2を用法の分類に気をつけて見てみると、不思議なことに気が付く。④反語の用法については1話の中で『重刊老乞大』で存続するものと、消失するものがあるということである。同じ套話のなかで同じ用法であるならば、どちらも存続するか、あるいはどちらも消失するのが自然なように感じるが、この反語の存続と消失の不統一には何かルールがあるのであろうか？試みに、1話の中で反語の“呢”が複数あるものをすべて拾ってみよう。

(13) 第37話 ④反語

【新】你這般大人家，量我兩三箇人，却怎麼說房窄下不得呢？(37/15b5-6)

【重】你這般大人家，量我兩三箇人，却怎麼說房窄下不得？(37/15a1-2)

(14) 第37話 ④反語

【新】怎敢就容留你們住呢？(37/15b10)

【重】敢容留你們住呢？(37/15a6)

(15) 第56話 ④反語

【新】新羅蓼狠好，怕有甚麼賣不出去呢？(56/23b5-6)

【重】新羅蓼狠好，怕有甚麼賣不出去？(56/22b5-6)

(16) 第56話 ④反語

【新】萬一在先一樣的價錢麼，一定虧本，誰肯帶來呢？(56/23b7-8)

【重】萬一在先一樣的價錢麼，一定虧本，誰肯帶來呢？(56/22b7-8)

(17) 第77話 ④反語

【新】客人，我店內若沒有好弓，做甚麼買賣呢？(77/32b1-2)

【重】客人，我店內若沒有好弓，做甚麼買賣？(77/31a7)

(18) 第77話 ④反語

【新】既是好弓，怎麼怕拉呢？(77/32b4)

【重】既是好弓，怎麼怕拉呢？(77/31a9-10)

(19) 第89話 ④反語

【新】若教的不好，不能成人，雖是他的命該如此，咱們爲父母的心，怎麼能不懊悔呢？（89/36b5-6）

【重】若教的不好，不能成人，雖是他的命該如此，父母的心，能不懊悔？（89/35a3-4）

(20) 第 89 話 ④反語

【新】若在人前面，摠不肯出力，便到處不得人意，還想誰喜歡他呢？（89/36b10-37a1）

【重】若在人面前，摠不肯出力，便到處不得人意，還想誰喜歡他呢？（89/35a7-8）

以上を表 2 と同じ形で示すと、次のようになる。

表 3 反語の“呢”が 1 話中に複数ある場合

新釈 話数	1			2			3			4			5		
	新	重	分	新	重	分	新	重	分	新	重	分	新	重	分
37	○	×	④	○	●	④									
56	○	×	①	○	×	①	○	×	⑤	○	×	④	○	●	④
77	○	×	④	○	●	④	○	●	⑦						
89	○	×	④	○	●	④									

以上の 4 話には、反語の“呢”が 2 例ずつあり、すべて先の“呢”は削除され、後の“呢”は存続している。先に述べたように、反語の用法の“呢”の用法は比較的存続する傾向が強いが、たとえば「反語の“呢”が 1 話の中に複数ある場合は、後の“呢”のみを残す」というような申し合わせがなされていた可能性がある。

5. 結論

以上、清代改訂本の『老乞大新釈』及び『重刊老乞大』にはどのような編纂方針の違いがあったのかを考えるために、“呢”の改訂の様子を確認してきた。

全体としては『老乞大新釈』から『重刊老乞大』へは“呢”を削除する方向へ改訂がなされていると言えるだろう。

“呢”の存続と削除は、その用法と大きな関わりがある。当時定着していた用法と、“呢”の用法として安定していなかったものとは、『重刊老乞大』での存続に大きな差が出るようである。しかし、“呢”の用法以外にも存続と削除に関わる二つの大きな要因があると考えられる。

一つは改訂者の語感である。表 2 とその分析で確認したように、“呢”の存続については、改訂者の違いが反映される。

もう一つは、改訂時に全体としての「申し合わせ」のような編纂のルールがあった可能性である。

これらを総合すると、『老乞大新釈』からわずか 34 年で再度改訂された『重刊老乞大』での改訂は、見落としや偶然、あるいは途中での編纂方針の変更といった要素を含む疎漏なものではなく、いくつかのルールに則った緻密な作業であったといえるのではなかろうか。上に挙げたようなルールが重なりあうため、一見したところ改訂に規則性が見えにくく、恣意的な印象を与えてしまうが、改訂者毎に“呢”の存続または削除について考慮、選択を重ねた結果であったのではないだろうか。

『翻訳老乞大』から 200 年以上の時間を経て大きく改訂された『老乞大新釈』では、時代の流れとともに変化した言葉を写し、大きな変化があった。それから 34 年を経てなされた『重刊老乞大』における改訂は、単に口語的で規範的でないと考えられたものをいくつか削り『翻訳老乞大』の段階に戻したのではなく、その改訂の個々についての分析を経て、削除すべきものを削り、存続させるべきものを残したのではないだろうか。

『重刊老乞大』における改訂にあっては、大きな方針や申し合わせのようなものはあったが、具体的な部分については個々の改訂官の権限に委ねられた。それゆえ、全体としての統一したルールは見えにくいだが、それは決して恣意的なものではなく、『老乞大新釈』を改訂者毎に、より精査した結果であった。そうであれば『重刊老乞大』の言語資料としての価値は、『老乞大新釈』に決して劣るものではなく、むしろその当時の言語のありようをより精密にうつす貴重な資料であると言えるだろう。

※本稿における『老乞大』諸テキストの用例検索及び引用は、すべて竹越孝（2007）とその電子版に基づくものである。【旧】は『旧本老乞大』、【翻】は『翻訳老乞大』、【新】は『老乞大新釈』、【重】は『重刊老乞大』を表し、用例後の（ ）内には話数/葉数・表裏・行数を示す。

<参考文献>

- 金文京・玄幸子・佐藤晴彦訳注、鄭光解説（2002）『老乞大—朝鮮中世の中国語会話読本—』東京：平凡社（東洋文庫 699）。
- 呂叔湘主編（1980）『現代漢語八百詞』北京：商務印書館；牛島徳次監訳（1992）『中国語用例辞典』（『現代漢語八百詞』日本語版）東京：東方書店。
- 竹越孝（2007）『中国語のコーパス構築および近世中国語テキストの計量言語学的研究』、平成 15-18 年度科学研究費補助金（課題番号 15520269）研究成果報告書。
- 太田辰夫（1990）『『老朴』清代改訂三種の言語』、『中文研究集刊』2。
- 汪維輝編（2005）『朝鮮時代漢語教科書叢刊』北京：中華書局。